

The True Nature of Tongues

異言の正体

聖書が教える異言は何ですか？



ジョン・R・ハイムズ著

By John R. Himes, MA

この本を校正してくださった東郷裕康さんに感謝いたします。

愛する兄弟よ、また天国で会いましょう。

ジョン・R・ハイムズ

目次

前書き	3
第1章 異言の歴史	5
第2章 聖霊のバプテスマのしるしは異言ですか	1 2
第3章 聖霊の満たしのしるし	1 6
第4章 聖書の異言はどう解釈しましょうか	2 1
第5章 聖書の異言の正体	2 7
第6章 どうしましょうか？	3 4

この本の目標

異言を語る方を責めたくありません。でも自分の教会や姉妹教会のために、異言について聖書の教えを明らかにしたいです。異言を語る人々を愛しながら、自分の教会を守ったり、他の牧師や教会を助けたりするためにこの小さな本をお捧げ致します。

なお、この本には、異言の教会が教える癒しや聖書に加える預言については教えません。もし興味があれば、今度にするかも知れません。

前書き

立派なカップル

ダイニング・テーブルにすわって相談していました。相手は立派な御夫婦でした。私を丁寧に歓迎して下さいました。御主人は頭がいい方で、もう20年間のクリスチャン生活を過ごしてきました。とても熱心な信者でした。奥様は美人で、顔に喜びの表情がありました。

相手の教会は強い立場を取っていました。エキュメニカル的なのカリスマ運動に立ち向かって、背教の教会に反対していました。また、個人分離を信じて、清い生活をしようとしていました。

では、問題は何だったのでしょうか。なぜこういう相談が必要でしたか。そのカップルは真面目に異言を信じていたからです。彼らによると、異言は聖霊のバプテスマのしるしであるし、クリスチャン生活のためにとっても大事な経験です。そして、うちの教会も異言を語るべきだと言っていました。つまり、彼はうちの教会を相手に異言の伝道をしていました。

御主人によると、異言によってよいクリスチャン生活ができるそうです。彼は前にカリスマ運動の教会に出席してしましたが、その教会の異言は偽物で、クリスチャン生活は偽善のものだそうでした。また、聖書の教義を教えてくださいませんでした。彼はやっとカリスマの教会をやめて、今の教会に通うようになりました。そして、やっと正しい異言を通して正しいクリスチャン生活ができるようになったと言っていました。

イエスがあの若いお金持ちを愛されたように（マル10：21）、私もこのカップルを愛しました。交わりたかったです。しかし、「うちの教会に問題を起こさないでください。私たちは異言を信じませんから。私はお宅の教会にも問題を起こしたくありません。でも、私は自分の立場を守りますし、自分の教会の責任を取らなければなりません。」と私は言わなければなりませんでした。

しかし、御主人は答えました。「どうぞ、うちの教会に問題を起こしてください。私はお宅の教会に問題を起こしますから。真理のために何でも問題を起こしたいです。」

異言の危険性

それこそ異言の危険性です。異言を語る人は自分で、あるいは自分の教会だけで異言を語ることに満足しません。他の教会の信者も異言を語るように努力します。例えば、アメリカのあるビジネスマンの団体は他の教会の会員に異言を紹介するために始められました。カリスマ運動は特にそうします。カリスマの教会の大部分はもともと違う教派でした、あるいは教会の分裂から始まりました。ですから、バプテストやメソジストやカトリックのカリスマの信者もいます。例えば、私の東京日本語学校のクラスメートの一人はカトリック教のカリスマの神父でした。

さいわいに、あの相談の相手の牧師は、うちのバプテスト教会に分裂を起こさないようにとあの御夫妻に注意していただきました。

私自身は小さいときから教会のケンカが大嫌いです。なぜなら、父の牧会していた教会にも、自分の牧会する教会にも教会分裂を経験したことがあります。教会分裂はとても辛い経験です。

でも、自分の気持ちよりもっと大事なものは聖書の教えです。聖書によると、「17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。18 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」(ローマ書16：17～18) また、「10 分派を起こす者は、1、2度戒めてから、除名しなさい。11 こういう人は、あなたも知っているとおりに、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。」(テト3：10～11)

自分の教会にも他の教会にも分派やケンカや分裂をおこしてはとていけません。例外は二つだけです。自分の教会に道徳的、または教理的な問題があれば、教会として正すべきです。(マタ18：15～18、1テモ5：19～20など) 道徳的や教理的な問題がなければ、教会の平和を守り、牧師を尊敬したり従ったりするべきです。

第1章

異言の歴史

異言とは何ですか。二つの種類があります。まず、奇跡で話す他国語です。使徒の働き2章の異言は明らかに他国語の異言です。

問題は異言の二番目の種類です。それは「未知の異言」、あるいは「エクスタシーの異言」とも言われています。話す人は自分の言っている言葉の意味がわからないので、「未知」と言われています。そして、すばらしい気持ちで異言を語るから、「エクスタシー」と言われています。しかし、異言を語る人はこれが自分にとって未知であっても、天使の言語、あるいは自分の知らない外国語であるとも言います。

異言の信者は時々自分の異言や自分が聞いた異言が本当の奇跡的に与えられた外国語であると主張します。しかし、そういう事件はまず珍しいです。

未知の異言を別にして、ペンテコステ派にも、使徒2章の宣教のために用いられた外国語の異言と主張することはあまりありません。ペンテコステ運動の始めに、奇跡的な異言で伝道しようとする事がよくありましたが、だいたい失敗で終わりました。(Azusa Street and Beyond, ed. by L. Grant McClung, Jr.: Bridge Publishing, NJ, 1986, p. 13-14) 例えば、1906年にアメリカから18人のペンテコステ派の宣教師は東洋(日本、中国、インド)に遣わされて、奇跡的な外国語の異言を話そうとしましたが、全部は失敗で終わりました。今もペンテコステ派の宣教師は必ず言語学校に行かなければなりません。私の通っていた東京日本語学校にもペンテコステ派の宣教師がいました。ですから、この本ではそう言われる外国語の異言を勉強しません。

この本のために、自分の知らない言語の異言や喜びを与えるエクスタシーの異言を「未知の異言」と言って勉強しましょう。「天使の異言」と言われる言葉も未知の異言と呼びましょう。なぜなら、もし天使の言語であるな

らば、天使が現れて来ないかぎり、証明ができません。また、奇跡的な外国語なら、それが話せる人がいないならば、それも証明ができません。ですから、この二つも未知の異言と言えればいいでしょう。

異言の魅力

異言の魅力はどこにありますか。まず簡単です。異言の信者はこのように言います。「異言を語ったら、すばらしい喜びを持つことができます。そして、この祝福を通してあなたのクリスチャン生活が簡単になり、あなたは罪に勝つことができます。」

もしそれが本当であるならば、キリスト者は誰でも異言を語りたくなるでしょう。でもこの本で証明するようにそういう約束は聖書のどこにもありません。聖書的ではありません。

歴史的に見えた異言

キリスト教以外の異言

異言は決してキリスト教のものだけではありません。1世紀にもいろいろな偶像の宗教は異言を語っていました。例えば：デルフィの宮の宗教や当時の「神秘の宗教」やグノーシス教やシリヤの女神ジュノの宗教などです。

現代にもキリスト教以外に異言を語る宗教があります。例えば、イスラム教のダービシュ聖人やヒンズー教のある聖人です。したがって、悪魔が話させる偽物の異言もあると言えます。これから勉強するように、キリスト教にも偽物の異言があります。

キリスト教の教会史に、異言は時々ありましたが、運動としては歴史に3回だけありました。それは、2世紀の後半～4世紀のモンタヌス主義と20世紀のペンテコステ派とカリスマ運動の三つです。

モンタヌス主義

モンタヌスというシベレ女神(Cybele)の宮の祭司は、イエスを信じて牧師になりました。彼はキリスト教を改革しようとした。彼は特に個人分離に関していい立場を持ちました。しかし、彼の奉仕はいろいろな理由で他の教会に断われました。その理由の一つは彼の異言の教理でした。

シベレ女神の宗教にも異言があったから、たぶんその理由でクリスチャ

ンになったモンタヌスも異言で語るようになったでしょう。また、彼の二人の女弟子であったプリスキラとマクシミラも異言を語ったり預言の権威を主張したりしました。

「教会史」という本を書いた5世紀の伝道者ユーセビウスによると、モンタヌスは、「霊的におかしくなって、ある意味で狂っている人のようになり、変な言葉で語ったり話したりしていた。」また、ユーセビウスによると、プリスキラとマクシミラも同じでした。

いろいろな異言

それから1000年以上の教会史によると、異言が語られた証拠がありません。16世紀のあるドイツのアナ・バプテスト（バプテスト教会の先祖）や17世紀のフランスのジャンセン主義の教会に異言が時々あったそうです。しかし、これらは教会の運動や教派ではなくて、ただある人が個人的に異言を話しただけです。

シェーカーズ

また、18世紀のアメリカの異端であったシェーカーズにも異言があったそうです。シェーカーズはアン・リーという女性に創立されました。彼女は主人を捨てて、いろいろな啓示や異言や預言で異端を始めました。しかし、教えはあまりにもおかしかったので、このグループはもう存在していません。

公同使徒教会

19世紀の英国で、エドワード・イルビングという長老教会の牧師は、異言などの理由で教団から追い出されました。彼はすぐ死にしましたが、彼の弟子たちは Catholic Apostolic Church（公同使徒教会）を創立しました。

イルビング自身は異言を語らなかったが、彼の教会で異言を語ったり預言を史たるする二人の女性のことを調べたうえ、異言の教えを受け入れるようになりました。しかし、これは他の教会に広まる運動にならなくて、英国の現代にいたるまでただ一つの小さい教派だけです。

ペンテコステの運動

1901年の元旦でした。アメリカのカンザス州のトペカ市のベテル聖書神学校で、アグネス・オズマンという女子の生徒は異言を語り始めました。ペンテコステ派の運動はだいたいその日に始まったと言われています。校長

のチャールズ・パーハムの影響によって、異言は広まりました。聖霊のバプテスマのしるしは異言であるという教えはこのパーハムを通して広まったのです。

パーハムは1905年にテキサス州のヒューストン市にも神学校を始めました。その生徒の一人はウィリアム・セーモーでした。セーモーはロス・アンジェリス市の Apostolic Faith Gospel Mission（使徒信仰福音ミッション教会）を開拓しました。そこで1906～1909年に異言のリバイバルを通してペンテコステ派の運動は全世界に広まるようになりました。

カリスマ運動

1960年に、カリフォルニア州でデニス・ベネット神父という聖公会の牧師は異言を語り、教会の分裂を起こしてしまいました。そういうわけで、カリスマ運動は教会の分裂で始まって、教会の分裂で続いています。カリスマ運動はペンテコステ派ではない教会に入ってしまったペンテコステ派です。

「カリスマ」という言葉の語源は何ですか。ギリシャ語の「賜物」という単語から作られました。カリスマ運動は聖霊の賜物を強調します。

カリスマ運動の教理は何ですか。エキュメニカルな運動です。エキュメニカルとは、キリスト教のすべての教派は、教理を交わる理由にしないで、イエス・キリストのお名前だけで協力すべきである、という運動です。

カリスマ運動はエキュメニカルですから、決まった教理はありません。しかし、ほとんどのカリスマ教会は異言や癒しを認めます。また、聖書に加えて、神の啓示を受けた預言という教えも認めます。

カリスマの信者の目標は異言を認めない教会が異言を語るようになる、ということです。うちの教会に二人の熱心な兄弟がいました。主を愛し、伝道で励んでいました。しかし、牧師の私がアメリカにいた間に、カリスマ運動である純福音教会の祈り会に誘われました。私が日本に帰ったら、「私たちは韓国に行って、一週間の祈り会に参加します。」と兄弟が言いました。やっぱり異言を語るようになり、うちの教会をやめて、純福音教会に行くようになりました。でも、その興奮がとうとうなくなった時に、その教会もやめて、どの教会にも行かなくなりました。

カリスマ運動は教会を始めることより、他の教会のメンバーを盗むことが多いです。自分の教会を開拓しないで、福音派や根本主義者の教会に異言を伝えることが多い運動です。その態度は今まで続きますから、カリスマ運

動は多くの教会のけんかや分裂をさせてしまったことがあります。その理由だけで霊的にとても危ない運動です。

日本の異言の教会

現代のキリスト教では、だいたい三つのグループが異言を語ります。ペンテコステ派の教会とカリスマ運動とある異端的な教会の三つです。

ペンテコステ派

まずは、ペンテコステ派の教会です。「ペンテコステ」とは、英語の聖書からで、「五旬節」という意味です。ペンテコステ派の信者によると、自分の運動は使徒の働き2章の五旬節のリバイバルに基づくそうです。そのリバイバルは現代の教会の模範であると感じて、異言を通してそれを実行しようとしている運動です。伝統的なペンテコステ派はモンタヌス主義に似ています。異言を語ったり聖書以外の啓示の預言を認めたり個人分離の立場を取ったりする特徴があります。

ほとんどのペンテコステ教会はアズーザ道リバイバルから来ましたが、チャーチ・オブ・ゴッドは1880年代に、ホーリネス運動から来ました。日本では、日本チャーチ・オブ・ゴッド教団は異言を語る教会です。注意：異言を語らないチャーチ・オブ・ゴッドもあります。

日本のペンテコステ派には、これらが主なグループです：日本アッセンブリー教団、ベタニー・クリスチャン・アッセンブリーズ、神の家族キリスト教会、日本フォースクエア福音教団、日本福音教会、日本オープンバイブル教団、日本ペンテコステ教団、日本福音宣教会、日本ネクスト・タウンズ・クルセード日本ペンテコステ神の教会教団、ペンテコステ福音などがあります。

カリスマ運動の教会

カリスマの教会はだいたい単立です。また、教会の名前も独特ですから、判断しにくいです。牧師や会員にその教理を聞かないと判断ができないでしょう。

また、多くのペンテコステ派の教会や教団はだんだんカリスマ的になってきました。そういう教会は、交わったり協力したりする教会を通して判断することができるでしょう。

異言を語る異端的な教会

「ジーザス・オンリー」（イエスだけ）というペンテコステ派の教会もあります。ジーザス・オンリーの教会は他のペンテコステ派の教会に分離されています。なぜなら、三位一体の教えを認めないグループなのです。その代わりに、神はお一人だけの性格があって、それはイエスと呼ばれていることを信じます。つまり、父なる神も聖霊も御子もイエスだけです。

日本では、日本ユナイト・ペンテコステ教団は「ジーザス・オンリー」です。その教義は次のようです。「聖なる唯一の神エホバが肉体を取り、イエスとして来給うことを信じる。1テモテ3：16、新約の完全なる救いを受けよ。(イ)悔改めよ。行伝2：38、(ロ)イエスの名によるバプテスマを受けよ。(ハ)異言をとまなう聖霊のバプテスマを受けよ。行伝2：4、婦人の長髪は聖書的である。1コリ11：15、什一、聖日を厳守せよ、マラキ3：10。」(「キリスト教年鑑」、1989版、p. 247)このグループは明らかに行いによる救いを教えています。それは大きな間違いです。

「イエス之御霊教会」というグループもあります。イエス之御霊教会は異言を語る教えや三位一体を認めない教義と同時に、バプテスマによる救いをも信じています。また、主の日である日曜日の代わりに土曜日を安息日と言い、土曜日に礼拝をします。そして、「死者の救いのために身代わり洗礼を行なう」教えもあります。イエス之御霊教会は他の教会を認めないで、自分が「初代教会の復興したる真の全ったきイエス・キリストの教会」であると教えます。(「キリスト教年鑑」、1989版、241ページ)

「後の雨」という単立の異言の教会もいくつか日本にあります。「後の雨」とは、聖書(エレミヤ3：3、ヨエル2：23、ゼカリヤ10：1など)から取られ、1940年代のアメリカのアッセンブリー・オブ・ゴッドの教派に起こった運動を示します。でも、異端的と思われていたので、アッセンブリー・オブ・ゴッド教団から追い出されました。

「後の雨」の間違った教理は四つありました。①按手によって聖霊の賜物を与えること ②啓示ができる使徒と預言者 ③「支配権の指令」(Dominion Mandate)の教え——「支配権の指令」とは、後千年王国説のようです。④「神の表れた子達」(Manifest Sons of God)の教え——この教えによると、信者はイエス・キリストと同じように神性を持つことができます。

これはもちろん全部間違っている教えですが、「神の表れた子達」の教えは異端的で、とても危ないです。「後の雨」の教会は少ないですが、残念

ながら多くのカリスマ運動の教会もこの教理を教えます。

異言は大事ですか

これら全部のグループにとって、異言はとても大事です。その教理によると、異言は聖霊のバプテスマのしるしです。もしあなたは異言で語ったことがなければ、あなたは聖霊のバプテスマを受けたことがないそうです。したがって、あなたは霊的なクリスチャンではありません。あなたはクリスチャン生活で失敗しています。あなたの異言を語らない教会も霊的ではないし、死んでいる教会です。

これは本当ですか。第2章で聖霊のバプテスマではじめましょう。異言は本当に聖霊のバプテスマのしるしでしょうか。違いますか。

第2章

聖霊のバプテスマの印は異言ですか

私は異言の教会のA婦人に言いました。「聖霊のバプテスマは8回だけ聖書にのっています。その中、どのぐらいは異言についてでしょうか。」A婦人は答えました。「きっと5、6回でしょう。」「2回だけです。」と私の説明を聞いたAさんはとてもびっくりしました。(使徒の働きには、異言の事件は3つだけありますが、聖霊のバプテスマと言われたときは2回だけです。)

では、聖霊のバプテスマという表現は8回だけ聖書に出ています。一つ一つ解釈したら、聖霊のバプテスマのしるしは異言であるかどうかということがわかるはずです。

キリストの体にバプテスマされた事

聖書によると、イエスを信じる人は聖霊によって一つの体にバプテスマされたこと。「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も1つのからだとなるように、1つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が1つの御霊を飲む者とされたからです。」(1コリ12：13)この箇所は聖霊の力や異言ではなく、救いによってキリストの体である教会に入れられることを示しています。

次の箇所もご覧ください。「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。」(ロマ6：3)「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」(ガラ3：27)

聖霊のバプテスマの預言

バプテスマのヨハネの聖霊のバプテスマの預言は4回ついています。マタイ3：11とマルコ1：8とルカ3：16とは、共観福音書が述べる同じ預言でしょう。バプテスマのヨハネは簡単に聖霊のバプテスマを預言しました。「私は、あなたがたが悔い改めるために水のバプテスマを授けていますが、私の後から来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」(マタイ3：11)でも、ヨハネは異言や他のしるしを全然預言しませんでした。

また、ヨハネ1：33によると、ヨハネは聖霊のバプテスマの啓示を与えられました。「私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『聖霊がある方の上に向かって、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』」でも、その時も異言や他のしるしは啓示されませんでした。

使徒1：5によると、イエスご自身も聖霊のバプテスマを預言されました。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」この預言では、はじめて聖霊のバプテスマのしるしが教えられています。でも、イエスによると、異言ではなく、宣教のための力です。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(8節)

聖霊のバプテスマの預言の成就

さて、聖霊のバプテスマと言われるただ二つの事件を勉強しましょう。

使徒の働き2章はとても大事な事件を述べています。この事件ははつきりと使徒1：5の預言の成就です。従って四福音書の預言の成就でもあります。その預言はどういうふう成就されましたか。

① 天から、激しい風の響きが聞こえました。(2節)

② 炎のような分かれた舌が弟子たちの頭の上にとどまりました。
(3節)

③ 「すると、みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました。」(4節；5～12節もご覧ください。)

話しの内容は、「神の大きなみわざ」（11節）でした。

④ ペテロはメッセージをしました。（14～40節）

⑤ 三千人ほどイエスを信じて、バプテスマを受けました。

（41節）

この中、未知の異言というしるしは全然ありませんでした。ここの異言ははっきりと人間のわかる他国語です。

この五つのしるしの中、一回だけ行われたしるしもあります。それらは問題ではありません。ペンテコステ派は炎の舌を教えません。問題は、聖霊のバプテスマの確かなしるしは何であるかです。

大事なしるしは異言ですか？

この事件のもっともすばらしい結果は何ですか。異言ではなく、3千人の人の救いではありませんか。人間の救いはイエスの地球に来られた理由でもあるし、イエスのお喜びになる結果です。

イエス御自身が言われました。「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない99人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」（ルカ15：7）

使徒パウロが言いました。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。」（1テモテ1：15）罪人の救いはイエスの世に来られた目標でしたから、彼の弟子でありたい私たちも罪人の救いを第一にすべきです。

人間の救いはほかの霊的な経験よりもとても大事なのです。「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」（ルカ10：20）

聖霊のバプテスマの第2事件

聖霊のバプテスマの第2事件は、コルネリオという異邦人の家庭で行われました（使徒10：1～11：18）ペテロによると、この事件では、異邦人もユダヤ人と同じように聖霊のバプテスマを受けました。（11：15～18）

この事件の結果は何でしたか。「彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。」（10：46）彼らは異言を話しましたが、その異言は

未知の異言ではないことが明らかです。なぜなら、ペテロによると、このときも使徒2章と同じような事件でした。「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができましょうか。」(47節) コルネリオたちはこの異言で神を賛美しましたから、その異言は理解ができる言葉でした。また、神を賛美しました。このときのしるしもイエスのあかしでした。

風の響きと炎の舌は今回なかったので、聖霊のバプテスマのしるしではないことがわかります。大事なしるしは、異言(人間の言葉)で神を賛美すること、つまりイエスのあかし(伝道、宣教)なのです。

最後に

聖書を心から神のみことばとして信じますか。では、深く考えてください。神の他には誰も知らない未知の異言のことばは、「聖霊のバプテスマ」という表現が出る八つの箇所には全然ありません。ですから、異言は聖霊のバプテスマのしるしであると言っては正しくなく、聖書的ではありません。

もし未知の異言を語る事が正しいと思ったら、聖書の別の箇所で証明しなければなりません。たとえば、異言は聖霊の満たしのしるしでしょうか。

第3章

聖霊の満たしのしるし

バプテスマと満たしは同な事件

使徒2章の事件で、聖霊のバプテスマと聖霊の満たしと同じであることがわかります。なぜなら、聖書は両方の単語でこの事件を示します。同じ事件を示す使徒1：5と2：4を比べて下さい。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

(1：5)「すると突然、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。」(2：4)

多くの学者によると、こう解釈することができます。聖霊のバプテスマは救われるときで、はじめて聖霊が心に入ってくくださるときです。聖霊の満たしはその後で、何回も行われるでしょう。つまり、聖霊のバプテスマは一回だけですが、満たしは何回も必要でしょう。罪を犯して失われた罪人の重荷を失ってしまう信者はあらためて聖霊に満たされる必要があります。

これは大事なポイントですから、覚えてください。なぜなら、そのため、聖霊の満たしのしるしは聖霊のバプテスマのしるしと同じであるはずで

では、「聖霊の満たし」というような表現を勉強しましょう。

旧約聖書の聖霊の満たし

旧約聖書で3人だけは聖霊に満たされました。(もちろん、同じような事件で違う表現があります。例えば、御霊がその上にとどまった、などです。)でも、誰も異言を語りませんでした。異言を語る教会もこれを認めます。聖霊は五旬節まで信者のみなに与えられなかったから、異言も与えられなかったという説です。しかし、聖霊の満たしを解釈するために、旧約聖書も大事

ですから、この三人の人生を見ましょう。

まずベツアルエルです。(出エジ31:1~5、35:31) 彼が聖霊に満たされた理由は、「金や銀や青銅の細工を巧みに設計し、はめ込みの寶石を彫り、木を彫刻し、あらゆる仕事をするためである。」(出エジ31:4) つまり、神の奉仕のためでした。彼は神の宮の道具を作る任命を与えられましたから、神の霊の特別な助けが必要でした。

ヨシュアも、「知恵の霊に満たされていた。」(申命34:9) これはモーセと同じ奉仕をするためでした。ヨシュアはいつ聖霊に満たされたのでしょうか。ある時、ヨシュアは聖霊の力に反対しました。民数記11:25によると、「すると主は雲の中にあつて降りて来られ、モーセと語り、彼の上にある霊を取って、その七十人の長老にも与えた。その霊が彼らの上にとどまったとき、彼らは恍惚状態で預言した。」二人だけは天幕に集まった長老たちと一緒にではなく、みなの前で預言しましたから、ヨシュアは反対しました。

(28節) しかしモーセは、「主の民がみな、預言者となればよいのに。主が彼らの上に御自分の霊を与えられるとよいのに。」(29節) と言いました。たぶんヨシュアも聖霊に満たされたときにモーセの言葉を覚え、自分もそう望んだに違いないでしょう。私達もそう望みましょう。

預言者のミカも神の霊に満たされました。「しかし、私は、力と、主の霊と、公義と、勇氣とに満ち、ヤコブにはそのそむきの罪を、イスラエルにはその罪を告げよう。」(ミカ3:8) ミカの満たしはユダヤ人の罪を告げるためでした。つまり、御言葉の奉仕をするためでした。

新約聖書の聖霊の満たし

新約聖書のたくさんの人々は聖霊に満たされました。たとえば――

キリストの聖霊の満たし

イエス御自身は聖霊に満たされました。悪魔と戦うためでした。「さて、聖霊に満たされたイエスは、ヨルダンから帰られた。」(ルカ4:1前半) バプテスマのときに聖霊が鳩の形で下って来られたことによってイエスは満たされました。また、「御霊と力を注がれた」イエス(使徒10:38)は、「巡り歩いて良いわざを」なさいました。

これはイエスの公の奉仕の前でした。有名な巡回伝道師であったジョン・R・ライスはこの箇所に基づくすばらしいメッセージをしました。そのメ

メッセージの題は、「私たちの模範でおられるイエスが聖霊に満たされた方法」でした。確かに、イエスは奉仕をなさるために聖霊に満たされましたから、私たちも満たされるべきです。しかし、異言の教会の方も認めるように、イエスが異言を語った箇所は聖書にありません。であるから、なぜイエスのように歩みたい信者は異言を語る必要があるのでしょうか。

バプテスマのヨハネの家族

バプテスマのヨハネも（ルカ 1：15～16）ヨハネの母のエリサベツも（ルカ 1：41）、ヨハネの父のザカリヤも（ルカ 1：67）みな聖霊に満たされました。しかし、ヨハネの満たしはイスラエル人を神に立ち返らせるためでした。つまり、伝道のためでした。また、彼の母はマリヤを祝福するため、父は預言をするためでした。一人も異言を語りませんでした。

しかし、異言の教会の解釈によると、これは五旬節のリバイバルの前でしたから、異言を語ることができませんでした。でも、どう言ってもこの家族の3人は異言を語らずに神のためにすばらしい働きをしました。彼らの満たしは明らかに神の奉仕のためでした。

エルサレムの教会の人々

使徒 2：4 によると 120 人の弟子たちは聖霊に満たされました。「すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。」新約聖書の信者で、聖霊に満たされた人々はここだけで異言を語りました。しかし、これは未知の異言ではなくて、他国語でした。そして、伝道をするためでした。

エルサレムの教会の牧師であったペテロも聖霊に満たされました。「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。『民の指導者たち、ならびに長老の方々。』」（使徒 4：8）でも、彼は異言を語りませんでした。イスラエルの指導者・長老・学者たちにメッセージをするための満たしでした。

エルサレムの教会のみなは、五旬節の日だけではなく、他のときにも聖霊に満たされました。「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が振り動き、一同は聖霊に満たされ、みことばを大胆に語り出した。」（使徒 4：31）そのときの満たしは異言を語るためではなく、みことばを大胆に語るためでした。私たちも聖霊に満たされたら、大胆にイエスのあかしをするに違いありません。

最初の教会の7人の執事も聖霊に満たされました。「そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。」(使徒6：3) その一人は「信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ」でした。(使徒6：5) 執事たちは教会の奉仕をしましたが、異言で語った証拠は聖書のどこにもありません。また、ステパノは異言を語りませんでした。「しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。『見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。』」(使徒7：55) 神の敵にメッセージをし、天国のイエスを見、天国に行きました。キリストの証のために殺されましたが、異言を語りませんでした。

ステパノのようなすばらしい信者になりたくありませんか。それでは、聖霊に満たされましょう。自分のすべてを神に捧げて、献身しましょう。しかし、異言を語る必要はありません。ステパノは異言を語らなくても、イエスの証のために死ぬまで忠実なクリスチャンでした。

最初の宣教師たち

パウロは異言ではなくて、みことばを語るために聖霊に満たされました。(使徒9：17、13：9) しかし、1コリント14：18によると、パウロが言いました。「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを感謝しています。」これは未知の異言ですか。もしそうであれば、使徒の働きにそういう事件があるはずですが、ありません。パウロは異言を語った証拠がないですが、他国語を語ったことは確かです。次の章で勉強するように、この箇所はパウロが外国語の天才であったという意味です。

使徒パウロの仲間になったバルナバも聖霊に満たされていました。「彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人々が主に導かれた。」(使徒11：24) バルナバは異言を語りましたか。いいえ。忠実に伝道をして、たくさんの人々をイエスに導きました。聖霊に満たされたバルナバは救霊獲得の重荷が与えられました。現代の教会も大勢のバルナバが必要ではありませんか。

最初の宣教師であったパウロとバルナバがイエスに導いた弟子たちも聖霊に満たされていました。「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」(使徒13：52) 彼らは異言を語りましたか。いいえ。でもすばらしいクリスチャンになりました。勝利の生活をしていました。喜びにも満たされていま

した。そういうクリスチャンでありたいではありませんか。そうなるために、異言を語る必要がありません。

では、どうですか

ご覧の通り、「聖霊に満たされた」と言われている新約聖書の人のの中に、異言を語った人は使徒2章の人々だけです。そして、彼らの異言は明らかに外国語でした。はっきりと言えます。聖霊の満たしにも、聖霊のバプテスマと同じように、異言のしるしがありません。

主の命令——聖霊に満たされなさい

「18 また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。聖霊に満たされなさい。19 詩と賛美と霊の歌をもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。」(エペ5：18～19)「聖霊に満たされなさい。」と命令されています。この満たしのしるしはみことばと音楽の奉仕です。(19節)

異言は決してこの箇所に出ません。そして、新約聖書の全部を見ると、異言は三つの書にしかありません。なぜですか。大事ではないからです。大事なのは、失われて地獄に向かっている罪人のたましいの救いです。兄弟姉妹のための奉仕です。

最後に

では、聖霊の満たしのしるしは、何ですか。異言は、使徒の働きに3回しかありません。そしてその全部は、奇跡的でありながら、未知の異言ではなくて外国語の異言です。また、イエスご自身も聖霊に満たされましたが、異言を語られませんでした。しかし、聖霊に満たされたみなは神の奉仕(特に伝道やみことばの奉仕)をしました。ですから、聖霊の満たしのしるしは、聖霊のバプテスマのしるしと同じようには異言ではなくて、神の奉仕なのです。

第4章

聖書の異言はどう解釈しましょうか

一世紀の異言

確かに1～2世紀に未知の異言は、キリスト教以外に色々な宗教にありました。例えば、デルフィの宮の宗教や当時の「神秘の宗教」やグノーシス教やシリアの女神ジュノの宗教は全部未知の異言を語るがありました。しかし、聖書以外に、歴史は1世紀のキリスト教の異言を述べません。では、問題です：聖書に未知の異言がありますか、それとも聖書の異言はいつも外国語ですか。

「異言」という単語の意味

日本語の「異言」はいつもギリシャ語の $\gamma\lambda\omega\sigma\sigma\alpha$ (グロッサ) を訳します。この単語は三つの用法があります。

① 舌——「特に言語器官として」(「新約ギリシャ語辞典」、岩隈直著、99頁) この用法はマルコ7：33～35、ルカ16：24などにあります。

② 言語——この用法は使徒2：6にありますが、黙示録のたくさんの箇所にもあります。(5：9、など) 聖書以外に、一世紀の二人のユダヤ人はこの用法をしました。それは哲学者のフィロや歴史家のジョシファスでした。

③ 未知の異言——「異言、霊的エクスタシーにおいて発せられる普通人には解し得ない音声とする説もある。」(「新約聖書ギリシャ語小辞典」のp. 74、織田昭編) この用法は聖書以外にいつも宗教の関係でギリシャ語の古い書物に何回か出ます。問題は、聖書の異言はこの意味を持つことができますか。

新約聖書の異言の普通の用法

大命令のグロッサ

マルコの福音書には、グロッサという単語が二つの箇所にあります。7章に、グロッサは2回（33節と35節）ありますが、両方は人間の舌という意味です。

未知の異言のとして解釈する可能性では、大命令だけです。「信じる人々には次のようなしるしが伴います。…新しいことば（グロッサ）を語り…。」（マル16：17）ここで「しるし」ですから、これは明らかに奇跡的です。未知の異言として解釈する可能性があると言っても、一番簡単な解釈は使徒2章の外国語の異言の預言としてです。また、大命令だから、その異言はイエスの福音を宣べ伝えるためです。

これも考えて下さい。同じ箇所（16～18節）にある悪霊を追い出すことも、無事に蛇を持つことや毒を飲むことも、病人を癒すことも全部、使徒の働きに珍しいです。

普通の教会はこれらの奇跡を教会の礼典や習慣にしないでしょ。しかし、はずかしいことですが、この著者の出身のテネシー州のある教会は蛇をつかむ習慣を持っています。礼拝の一つとして、マルコ伝の16章に従おうと思って、毒蛇を持つ習慣ですよ。しかし、それはイエスのあかしになるどころか、教会を笑い者にしてしまいます。

毒蛇を無事に持つことと同じように、奇跡の異言も聖書の中に珍しいです。使徒の働きに3回だけです。なぜ教会の習慣にするべきですか。

ヨハネの弟子の異言

使徒の働き19章に興味深い事件があります。使徒パウロは聖霊の存在さえも知らなかったヨハネの弟子たちを見つけました。聖霊を受けた彼らは異言を語りました。

「パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。」（使徒19：6）こういう翻訳もできます：「パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らにお下りになり、彼らは外国の言葉で語り、また預言をした。」（詳訳聖書）なぜなら、言語のギリシャ語には、グロッサ（異言、外国の言葉）の形は手段の与格です。（J. G. メイチェンの「新約聖書ギリシャ語原典入門」、70ページごらんください。）

つまり、弟子たちは異言という手段で預言しました。使徒2章と10章の事件を考えると、これも外国語の異言ではありませんか。

1 コリント書12～13章の異言

1 コリント書12章(10節、28～30節)は異言を説明してはおらず、聖霊の賜物をリストするだけです。そして、異言はこの両方のリストの最後ですから、一番小さい賜物と言えるでしょう。そればかりではなく、異言はローマ書12:6～8の霊的な賜物のリストに異言は全然ありません。聖霊の賜物には、異言は決して大事ではありません。

第1コリント書13:1にグロッサのおもしろい用法があります。「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」

御使いの異言は未知の異言ではなくて、天使の言語です。ある異言を語る方によると、自分の話す異言は御使いの異言です。しかし、御使いが来て解き明かすことがなければ、全然証明ができません。

でも、異言の教会の解釈が正しいと思ってもどうですか。それでも、この箇所によるといくら御使いの異言を語っても、異言を通してよいクリスチャンになれません。よいクリスチャン生活は神の愛によるものです。

「愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならば、すたれます。」(1コリ13:8)この箇所は異言の意味を説明しないで、ただ「やみます」と教えているだけです。いつやみますか。二つの節があります。ディスペンセーション神学(Dispensation = 摂理)によると、10節の「完全なもの」とは聖書です。黙示録が96年に書かれたときに、聖書が完全になったときに異言も終わりました。2番目の説によると、「完全なもの」とは天国です。しかし、どの説にしても、天国に異言がありません。聖書によると、天国に到着するときに完全になりますから、異言は正しい生活に関係がありません。

聖霊の「深いうめき」

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」(ロマ8:26)ペンテコステ派の信者はこれが異言である解釈もします。しかし、これは口で話せる異言ではなく、人間の口が言い出せない言葉で、聖霊が信

者のとりなしをする時に言われます。

第1コリント14章の異言

さて、やっと未知の異言の解釈ができる箇所に来たでしょう。しかし注意してください。第1コリント書の14章の全部の「異言」は「外国語」の翻訳ができます。コリント市は港の都市で、外国語ができる人は多かったです。でも、未知の異言として考えましょう。まず2～6節読んでください。

「2 異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも聞いていないのに、自分の霊で奥義を話すからです。3 ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。4 異言を話す者は自分の徳を高めますが、預言する者は教会の徳を高めます。5 私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。6 ですから、兄弟たち。私あなたがたのところへ行って異言を話すとしても、黙示や知識や預言や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益となるでしょう。」

やっと、14：2～6節は未知の異言の意味の解釈ができますか。たぶんできるでしょう。しかし、これは解き明かすこと（通訳）ができる異言ですから、一番簡単な解釈は外国語の異言です。でもこの異言を未知の異言として解釈しても、この箇所の意味を覚えてください。異言を解き明かすことがなければ、わがままです。異言の教会には、礼拝に異言があるとかならず解き明かすべきです。でも普通の異言の教会には、解き明かすルールがありません。

この著者もあるとき、コリント市の教会のような国際教会でメッセージをさせていただきました。私は英語で語りました。英語ができた人々は理解ができました。しかし、英語ができなかった日本人や中国人やタイ人も、いく人かの通訳者を通して神のすばらしいみことばを理解することができました。それは1コリント書12～14章が教えていることです。もし解き明かす人（通訳者）がいなかったなら、英語のできなかった方は残念に御言葉を聞くことができなかったでしょう。

7～14節は未知の異言として解釈しにくいです。その異言の全部は意味を持つ言葉についてです。たとえば、9節を読んでください。「それと同じように、あなたがたも、舌（グロッサ）で明瞭なことばを語るののでなけれ

ば、言っている事をどうして知ってもらえるでしょう。それは空気に向かって話しているのです。」これによると、意味のないことばを言うことはまるで「空気に向かって」話すことと同じです。

異言の伝道をする異言の信者はよく18～19節を使って、こう言います。「使徒パウロは異言を語りましたし、勧めましたから、私たちも語るべきです。」でも、読んでください。「18 私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、19 教会では、異言で1万語話すよりは、他の人を教えるために、私の知性を用いて5つの言葉を話したいのです。」(18～19節)

使徒パウロは未知の異言を語った証明する箇所がありませんが、彼は言語の天才でした。ユダヤ人でしたので、ヘブライ語とアラム語ができました。ローマの市民でしたので、ラテン語もできました。また、ギリシャ語で聖書の手紙を書きました。パウロがこの箇所で言っていることはこれです。「私は、あなたがたのだれよりも多くの言語を話すことを神に感謝しています。」なぜ感謝しましたか。いろいろな言葉でイエスの福音を宣べ伝えて、人々をイエスに導くことができましたことを感謝していました。

パウロは22節で大事なポイントを教えています。「それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。けれども、預言は不信者でなく、信者のためのしるしです。」でも、異言の教会では、異言はだれのためですか。信者のためです。つまり、ペンテコステ派やカリスマの教会は使徒2章の異言のように人々をイエスに導くためではありません。聖書的ではありません。わがままです。

21～23節の異言は未知の異言ではなく、神のメッセージを伝える異言です。そして23節によると、異言を解き明かすことがなければ、礼拝に入ってくる未信者は「あなたがたを気遣いだと言わないでしょうか。」つまり、未知の異言は聖書的ではありませんし、わがままです。

第1コリント書14章のその後の節は異言を説明しません。異言を語る時のルールを教える箇所です。どんなルールですか。

- ① 「そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。」(26節 後半)
- ② 「もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても3人で順番に話すべきで、ひとりでは解き明かしをしなさい。」(27節)
- ③ 「もし解き明かす者がだれもいなければ、教会では黙っていなさい。自分だけで、神に向かって話しなさい。」(28節)
- ④ 「異言を話すことも禁じてはいけません。」(39節) これらの

ルールは次の章でもっと詳しく勉強しましょう。

最後に

聖書の「異言」という言葉はすべて「外国語」として翻訳ができます。しかし、あなたは未知の異言の解釈をしても、正しくて聖書的に語っているでしょうか。聖書の教えるルールを守っていますか。解き明かしていますか。教会の徳を高めるために異言を語っていますか、あるいは自分の楽しみのためですか。

第5章

聖書の異言の正体

異言についての事実

では、考えてみて下さい。もし聖書に未知の異言があるという解釈を認めても、現代に異言を語る教会は聖書的ではないことを聖書より証明することができます。聖書ははっきりと正しい異言について教えているからです。

みなが異言を語る訳はない

聖書によると、「みなが異言を語るでしょうか。」（1コリント書12：30）答えはもちろん、「いいえ」です。みなは異言を語ることができません。でも、ペンテコステ派の教会やカリスマ運動の教会の教理によると、みなは異言を語るべきです。彼らによると、異言を語らない信者は聖霊に満たされていないし、霊的でもないということです。それは聖書的な教えではありません。

一番小さい賜物

実は、異言は御霊の賜物のリストの最後です。（1コリント12：10、28～31）また、ローマ書12：6～8の霊的な賜物のリストには、異言が全然のっていません。したがって、御霊の賜物の一番小さいのであると言えるでしょう。しかし、ペンテコステ派の教会やカリスマ運動の教会によると、異言が一番大事です。これも聖書的な教えではありません。

異言よりいい賜物はたくさんあります。たとえば、預言は異言よりいいです。「1 愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。2 異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。」

というのは、だれも聞いていないのに、自分の霊で奥義を話すからです。3 ところが預言する者は、徳を高め勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。4 異言を話す者は自分の徳を高めますが、預言する者は教会の徳を高めます。5 私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明しをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。」(1コリ14:1~5)

「徳を高める」とは、どういう意味ですか。原語の言葉は「建物を建てる」という意味を持っていました。ですから、人間の「徳を高める」とは、成長させるための祝福であると言えます。つまり、具体的に霊的な助けになることです。

この箇所(2節)は未知の異言を示していません。解き明かし(通訳)がない外国語を示しています。これによると、異言に解き明しがなければ、わがままです。自分のためだけですし、教会の助けにならないし、聖書的ではありません。

愛も同じように異言よりだけではなく、聖霊のすべての賜物よりも大事です。1コリント書12:31によると、「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。」次の章は愛の賛美である13章ですから、愛は異言よりとても大事であることがわかります。愛より異言を勧める教会は聖書的ではありません。

異言を求めるべきではない

聖書の中に、誰も異言を求める人がいませんでした。異言は、聖霊が御自分の御心によって与えられた賜物です。ですから、「異言を求めなさい」とか、「異言で語りなさい」という命令も全然ありません。しかし、異言を語る信者によると、自分で求めるべきです。どちらが正しいですか、神の御言葉ですか、人間の考えですか。

自分の経験から例話をあげましょう。新宿駅の前でした。あるイエス之御霊教会のメンバーはこの著者を相手にして異言の伝道をしていました。その若い女性はこう言いました。「『主イエス・キリスト、主イエス・キリスト、主イエス・キリスト』と30分ぐらい言い続けたら、自分も知らない言葉を語りはじめて、すごい喜びになります。」

私は答えました。「それは聖書にありますか。」彼女が「はい」と言ったときに、私はポケットから日本語の新約聖書を出して、「見せてください。」

と言いました。しかし、彼女はできませんでした。「ああ、つまり、それは…」と言って、エペソを開いて聖霊についての箇所を見せてくれましたが、異言はもちろんエペソ書のどこにもありませんでした。イエス之御霊教会の負けでした。聖書に、「異言を求めなさい」という箇所が全然ありません。

コリント市の弱い教会

これも考えてください。異言は新約聖書のマルコ伝・使徒の働き・第1コリント書の3書にだけあります。マルコ伝には一節だけで（新改訳聖書に「新しい言葉」）、使徒に三つの箇所だけです。そのうち、一番多い書は1コリント書です。聖書の教会のなかで、コリント市の教会はもっとも霊的な教会であったところか、問題が一番多かったのです。第1コリント書はそういう問題を解決するために書かれました。異言はその問題の一つでした。ですから、その異言の問題が解決されたので、第2コリント書に異言という言葉が全然ありません！！コリント市の教会は模範の教会ではありません。コリント市の教会から学びましょう。でも、真似をしてはいけません。

個人的な異言は聖書にない

聖書の異言は全部グループで語ったものでした。一人だけで語る人は聖書に全然ありません。でも、カリスマ運動の信者はよく個人的（礼拝の異言ではなく）に異言を語ることがあります。これを「祈りの異言」と言います。しかし、考えていただきたいです。聖書に、個人的な異言は決してありません。「自分の祈りの異言」もありません。聖書の異言は全部教会の徳を高めるため、あるいは伝道のためでした。

悪霊が語らせる異言

異言は聖霊から来なければ、どこからですか。自分の心から来るかも知れません。あるいは、悪霊の力によって異言を語る場合もあります。キリスト教以外の宗教の信者や聖人も異言を語ることがあるので、きっとあるキリスト者も悪霊の力で異言を語っているでしょう。また、人間のわざで異言を語り始めることを教える教会もあります。

「愛する者たち。霊を差別なしにみな信用してはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。」（1ヨハ4：1）

理解された言葉のほうがいい

聖書によると、「教会では異言で1万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて5つのことばを話したいのです。」(1コリ14:19)パウロは自分の異言でわがままに楽しむことより、みなが理解できる5つのことばで教えたかったのです。

異言を語る時のルール

特に第1コリント書14章に異言についてのルールがあります。未知の異言を認めるとしても、これらのルールに従わなければ、聖書的な教会ではありません。そのルールは何でしょうか。

解き明かし

いつも異言を解き明かすべきです。「もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても3人で順番に話すべきで、解き明かしをなさいます。もし解き明かす者がだれもいなければ、教会では黙っていなさい。自分だけで、神に向かって話しなさい。」(1コリ14:27~28; 14:13~17もご覧ください。)異言を外国語として解釈したら、これは理解しやすいです。なぜなら、解き明かすことは通訳の意味になります。(実は、ギリシャ語のこの単語は通訳の意味もあります。)しかし、未知の異言を語る教会はこの「解き明かし」を奇跡的なものとして解釈します。でも、普通は異言の教会で異言が語られた場合に、いつも解き明かしがあるわけではありません。それは聖書的ではありません。

未信者へのしるし

異言は信者のためではなく、失われた罪人へのしるしです。聖書によると、「それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。」(1コリ14:22前半)つまり、聖書的な異言は伝道のためです。でも、異言の教会では、多くの場合に異言は個人的なものです。未信者に対する証としての異言はあまりありません。

あるペンテコステ派の信者はジョン・R・ライス伝道師に言いました。「ライス兄弟。あなたは聖霊にバプテスマされたことがあるか。」ライス伝道師は自分は神の力を知って、その力によって彼の奉仕を通して数万人救われたことがある、というふうに答えました。ペンテコステ派の信者が言いました。「そんなことじゃないよ。異言を語ったことがあるか、とぼくが聞いて

ている。」ライス伝道師は答えました。「みながわかる英語という異言で話しているから、神の祝福を受けている。自分もわからないような言葉で、誰をも祝福しない異言では語りたくない。」でも、異言の信者はやめませんでした。「でも、あなたは意志を捨てて、自分も知らない異言で語ったら、どんなに幸せになるだろう。」

ジョン・R・ライス伝道師の最後にこう答えました。「神は、招きに出てイエスに立ち向かう罪人をたくさんくださったら、いいです。酔っ払いが真面目になったり、売春の女性が清くなったり、無神論者が信者になったり、罪人が神の聖徒になったりすることこそ、私の幸せで、私の喜びなのです！」

徳を高めよう

異言は喜ぶためではなく、「徳を高める」ためです。「そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。」(1コリ14:26後半)でも、特にカリスマ運動の信者は個人的なプライベートの異言を教えます。「自分の祈りの言葉」としてです。それはわがままで、誰の徳をも高めないし、聖書的ではありません。個人のための異言は聖書のどこにも教えられていません。

二人か三人だけ

異言を語ったら、二人か三人だけが順番にできます。「もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても3人で順番に話すべきで、解き明かしをしなさい。」(1コリント14:27) これを守る異言の教会は少ないでしょう。ある教会はたくさんの人が同時に異言を語る礼拝をします。それは聖書的ではありません。

順番に

「順番に話すべきで…。」(1コリ14:27) 異言を語れば順番に語るべきです。同時に語ってはいけません。このルールもある異言の教会に破られています。

男性だけ

女性は教会で異言を語ってはいけません。「34 女は教会で黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません。律法も言うように、女は服従しなさい。35 もし何かを学びたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女にとってはふさわしくないことです。」(1コリント14:34～

35) 礼拝で女性の異言を禁ずる異言の教会があるでしょうか。でも聖書は禁じます。

不思議に、異言の多くの運動や教派は女性の異言で始まります。例えば、この本の1章で教えたように、モンタヌスに二人の女弟子がいました。そのプリスキラとマクシミラは二人とも夫を捨てて異言を受け入れてモンタヌスと一緒に新しい運動を始めました。同じように、19世紀の英国の Catholic Apostolic Church (公同使徒教会) の創設者であったエドワード・イルビングは自分の教会で異言を語り始めた二人の女性のことを調べたうえ、異言の教えを受け入れるようになりました。また、ペンテコステ派の始まりになったアズーザ道のリバイバルは、ベテル聖書神学校の女子の生徒であったアグネス・オズマンの異言を語ったことが種となりました。

普通のペンテコステ派の教会にも、カリスマ運動の教会にも、聖書に従わない女性は礼拝で異言を語ります。そればかりではなく、女性は伝道者の活動をしたり牧会したりします。例えば、フォースクエア福音教団の創立者は女性牧師のエイミー・マクフェルソンでした。彼女は主人を捨てて(結局三回結婚した)伝道者になりました。また、カサリン・クールマンという女性の伝道師も異言の教会の間に大きい活動をしました。(詳しくは、*Aspects of Pentecostal-Charismatic Origins*, ed. by Vinson Synan, Logos International, 1975, ご覧ください。)これらは全部聖書の反対です。

「9 同じように女も、つつましい身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪の色とか、金や真珠や高価な衣服によってではなく、10 むしろ、神を敬うと言っている女にふさわしく、良い行いを自分の飾りとしなさい。11 女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。12 私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。」
(1テモテ2:9~12)

異言を禁じてはいけない

聖書によると、「異言を話すことも禁じてはいけません。」(1コリ14:39) 異言の信者はよくこの節で異言を語らない教会を攻めます。

でもこれはもちろん正しい異言を禁じてはいけないという意味ではありませんか。言うまでもなく、正しくない異言を禁じるべきです。ですから、外国語を許す多くの聖書的な教会は、未知の異言を禁じています。この著者の教会では、聖書的ではない未知の異言をいつまでも禁じるつもりです。

最後に

異言の教会はほとんどこれらのルールを守っていません。たとえば、
解き明かすことがないほうが普通です。また、人数や順番はだいたい決まっ
ていません。そして、女性の異言を禁じるペンテコステ派やカリスマの教会
はあまりありません。

未知の異言は聖書的ですか。いいえ。聖書的であるならば、当然聖書に
書いてある教えやルールの通りに異言を語るべきです。しかし、普通の異言
の教会は聖書的に異言を語っていません。

第6章

どうしましょうか？

聖霊について正しく教えよう

英語にこういうおもしろいことわざがあります。"Don't throw the baby out with the bathwater!" つまり、「赤ちゃんのお風呂のお湯を捨てる時に、赤ちゃんをともに捨ててはいけません。」異言に反対する教会は、異言に反対することによって聖霊の教えを捨ててはいけません。いらないお湯は、初代教会にとって必要であった奇跡的な異言の賜物のようです。そのいらないお湯を捨てても、聖霊の教えを大事にすべきです。聖霊についての教理（その方の神性・性格・行いなど）も具体的なクリスチャン生活の教えも教えるべきです。

クリスチャン生活について聖書的な教えは何ですか。まず、聖霊に満たされましょう。つまり、聖霊はあなたの人生のすべてをコントロールするように決心してください。この本で勉強したように、それは神の奉仕、特に伝道の力を受けるためです。

それから、聖霊によって歩みましょう。それはよいクリスチャン生活ができるためです。「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」（ガラ5：16）

聖霊によって歩む信者はキリスト者として成長して、聖霊の実を結びます。「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」（ガラ5：22～24）

また、「御霊を消してはなりません。」（1テサ5：19）かえって、聖霊に導かれましょう。「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導

かれて、進もうではありませんか。」(ガラ5：25)

異言を語らなくても、カリスマ運動に反対しても、聖霊のすばらしい祝福を忘れてはいけません。イエス・キリストを中心にしながら、聖霊の導きや力や歩みを忘れないでください。

牧師は教会を守ろう

また、牧師は自分の教会を悪い教えから守るべきです。使徒パウロはエペソ市の教会の長老たちに注意しました。「28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。31 ですから、目をさましていなさい。私が3年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けてきたことを、思い出してください。」(使徒20：28～31)

牧師は羊飼いの心を持つべきです。自分の教会の者のために祈ったり苦労したり努力したりすべきです。迷った羊のことを悲しんだり助けようとして探しに行ったりするべきです。正しい牧師は主の方に戻る羊と一っしょに喜んで、主から離れる羊と一っしょに泣くべきです。そういう牧師はイエスの羊飼いの心がわかって来るでしょう。

分離する時もある

自分の教会で異言を語ろうとする人がいますか。そういう人に気をつけなければなりません。その問題をすぐ解決しようとしなければ、教会の分派になる可能性が強いです。聖書によると直接に相談すべきです。「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。このような人は、あなたも知っているとおりに、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。」(テト3：10～11)

教会の問題ではなければ、個人的に交わることのできる伝統的なペンテコステ派の信者もいるかも知れません。異言の伝道をしないで、良いクリスチャンであろうとするペンテコステ派の人もいるでしょう。

異言の信者を愛しましょう

本当にイエスの信者でありながら異言を語る人を憎んだり見下げたりしてはぜったいにいけません。彼らも神の子どもです。イエスの黄金律に従いましょう。「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」(マタイ7：12)

異言の信者を正すべきですか。まず第一に、本当に救われているかどうか聞くべきです。ある異言の教会は、イエス・キリストに対する信仰よりも、異言を中心にしますから、その教会の会員は大勢救われていません。そういう人に福音を伝えてイエスに導きましょう。

異言の信者に異言の間違いを教えるべきですか。その答えは場合によって違うでしょう。あなたはまだクリスチャンとして成長していないならば、やめたほうがいいでしょう。もしあなたは成長しているクリスチャンであったら、たぶん異言の信者を助けることができるかも知れません。でもぜひ自分の教会の牧師の指導に頼ってください。

もし相手は本当に聖書の権利を認めているならば、聞いてくれるでしょう。それもキリストの黄金律に従うことです。でももちろんそれは聖霊の導きによってです。

最後に

あなたは異言を語りますか。自分で、あるいは自分の教会だけで語ってください。決して他の教会の分裂を起こしてはいけません。「17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。18 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」(ロマ16：17～18) 交わりたいなら、異言のことを他の教会のメンバーに話さないでください。

しかしあなたはこう答えるかも知れません。「聖書によると、『異言を話すことも禁じてはいけません。』(1コリ14：39)と書いてある。」それはそうですが、他の教会はあなたの責任ではありません。異言を禁じるあの牧師はあなたに責任をもっていません。神のみ前に立たなければなりません。また、聖書的な教会は一つ一つ独立です。そして、彼の教理によると、彼は異言を禁じていません。

あなたは異言で迷っていますか。自分の牧師に従ってください。彼はあなたを主の愛で愛し、あなたの霊的な状態をいつも考えたり祈ったりしてい

るでしょう。彼は異言の危険を知っているから、あなたを守りたいでしょう。

異言で困っている牧師は、がんばってください。その愛するメンバーを守ってください。やめてはいけません。神はあなたにそのメンバーの霊的な責任を与えてくださっておられます。固く立って、悪い教えを大胆に攻めてください。聖霊は助けてくださっています。また、他の牧師も努力したり祈ったりしてくれるでしょう。最後までがんばって、主の再臨まで忠実であることを祈りましょう。

そして、私たち聖霊の力を求めるクリスチャンはみな、回りの失われた罪人の救いのために努力しましょう。イエスと同じように罪人を愛しましょう。日本にリバイバルが来るように祈りましょう。アーメン！

参考文献 Bibliography

日本語

- 「キリスト教年鑑」、1989版
「新約ギリシャ語辞典」、岩隈直著
「聖書」(新改訳、二版)。東京、日本聖書刊行会、1973年。

カリスマ運動の著者

- Fox, Lorne F. *This Is My Story*. Naselle, WA: self published, 1970.
Hunter, Frances Gardner. *God Is Fabulous*. Anderson, IN: Portal Books, 1968.
Robertson, Pat. *Shout It from the Housetops*. Logos International, 1972
Synan, Vinson, ed. *Aspects of Pentecostal-Charismatic Origins*. Plainfield, NJ: Logos International, 1975.

カリスマ運動・ペンテコステ派について

- Ankerberg, John and John Weldon. *The Facts on the Faith Movement*. Eugene, OR: Harvest House Publ., 1993.
Gaver, Jessyca. *Pentecostalism*. New York: Award Books, 1971.
Hall, Donald. *Cure for Charismatics*. Denver: Accent Micro-Books, 1973.
MacArthur, John, Jr. *Charismatic Chaos*. Grand Rapids: Zondervan Publ. House, 1992.
McClung, L. Grant, ed. *Azusa Street and Beyond*. Plainfield, NJ: Bridge Publishing Co., 1986.
Quebedeaux, Richard. *The New Charismatics*. Garden City, NY: Doubleday & Co., 1976.
Rice, Bill III. *Health, Healing and Heaven*. Murfreesboro, TN: The Bill Rice Ranch, 1976.
Robinson, Wayne A. *I Once Spoke in Tongues*. New York: Pillar Books, 1973.
Spence, O Talmadge. *Charismatism: Awakening or Apostasy?* Greenville, SC: BJU Press, 1978.

聖霊の教理

- Augsburger, Myron S. *Quench Not the Spirit*. Scottsdale, PA: 1961, 1975.
- Gilquist, Peter E. *Let's Quit Fighting About the Holy Spirit*. Grand Rapids: Zondervan Publ. House, 1974.
- Gordon, A. J. *The Ministry of the Spirit*. Philadelphia: American Baptist Publication Society, 1894.
- Gordon, A. J. *The Holy Spirit in Missions*. Harrisburg, PA: Christian Publications, 1892; 1968 reprint.
- Gordon, S. D. *Quiet Talks on Power*. New York: Grosset and Dunlap, 1903.
- Hutson, Curtis. *The Fullness of the Holy Spirit*. Murfreesboro: Sword of the Lord, 1981.
- Hyles, Jack. *Meet the Holy Spirit*. Hammond: Hyles-Anderson Publ., 1982.
- Ironside, H. A. *The Mission of and Praying in the Holy Spirit*. Neptune, NJ: Loizeaux Brothers, Inc., 1957.
- Jones, Bob, Sr. *The Holy Spirit*. Greenville: Bob Jones University, nd.
- McConkey, James H. *The Three-fold Secret of the Holy Spirit*. Chicago: Moody Press, 1897.
- Owen, John. *The Holy Spirit*. Grand Rapids: Kregel Publ., 1954 reprint.
- Rice, John R. *The Power of Pentecost*. Murfreesboro: Sword of the Lord, 1949.
- _____. *Meet the Holy Spirit*. Murfreesboro: Sword of the Lord, 1976.
- Roberson, Lee. *Be Filled With the Spirit*. Chattanooga: Highland Park Baptist Ch., nd.
- _____. *Endued With Power*. Chattanooga: Hebrew Christian Press, 1975.
- Scofield, C. I. *A Mighty Wind*. Grand Rapids: Baker Book House, 1973 reprint.
- Strauss, Lehman. *Be Filled With the Spirit*. Grand Rapids: The Zondervan Corp., 1976.
- Torrey, R. A. *The Holy Spirit*. Old Tappan, NJ: Fleming H. Revell Co., 1927.
- _____. *How to Obtain Fullness of Power*. Revell, 1897. Sword of the Lord reprint, nd.
- _____. *Why God Used D. L. Moody*. Murfreesboro: Sword of the Lord, nd.
- Van Gorder, Paul. *Power From On High*. Grand Rapids: Radio Bible Class, 1979.

ジョン R. ハイムズ
J o h n R. H i m e s

1951年アメリカのオクラホマ州に生まれる。テネシー・テンプル大学、1976年卒業。テンプル・バプテスト神学セミナーに一年。1981年に宣教師として来日。東京日本語学校1983年卒業。横浜市の喜びバプテスト教会（元港南台バプテスト教会）の開拓と牧会。1996年に、北海道に引っ越し、旭川市の勝利バプテスト教会を開拓と牧会。ABRI（旭川聖書研究学院）の学院長を勤める。2005年に、マラナタ・バプテスト大学院を聖書研究修士号で卒業。著者に、*The Making of a Soul Winner*（Sword of the Lord, 1978年）、「恵みか律法かーガラテヤ人への手紙の注解書」（1994年）、「誰でもできる伝道」、*Christian Philosophy of Self Defense*（GMAU 1999年）など。

「異言の正体」

PRINTED IN JAPAN

著者 J o h n R. H i m e s

2002年、2009年

発行者 H B R I（北海道聖書研究学院）

北海道旭川市旭神1の5の5の15，205号室

勝利バプテスト教会内